

俳優 竹下景子さん

東日本大震災から4年
「かたりつぎ」に寄せる願い



2015年3月5日、宮城県多賀城市で「かたりつぎ」朗読と音楽の夕べ」が開催され、東北大学災害科学国際研究所の「みちのく震録伝」が集めた東日本大震災の被災者の口述記録を、女優の竹下さんが詩のメッセージとして朗読しました。

「かたりつぎ」は、被災地の証言集を元に編集された「被災時の事実」と「体験者の想い」を音楽にのせて朗読するプロジェクトです。会場となった多賀城市文化センターの大ホールは、約1100人で一杯になりました。

竹下さんは、阪神淡路大震災からの復興を願い、1999年から2012年まで14回にわたって、1・17の神戸で音楽朗読会を続けていらっしゃいましたが、3・11の東日本大震災を受け、2012年からは、東北での『かたりつぎ』として引き継がれました。

神戸から14年、東北で4年、ボランティアで被災者とながる朗読を続けてこられた竹下さんの『かたりつぎ』に密着しました。

14:00～14:30
竹下景子さん
インタビュー

長きにわたって、被災地での朗読を続けていらっやいますね

— 阪神淡路の震災後、私が「メモリアル・コンサート」として朗読してきたのは、大きな災害があった時に、ニュースでは、亡くなられた方が何人、怪我をされた方が何人、失われた家屋が何棟とか、数字で挙げられますが、そう

神戸で朗読を始められる最初の「きっかけ」は？

— 震災直後の神戸では、復興のため、文化・芸術面での癒しの場を創り、文化の香りの



14:00～14:30 竹下景子さん インタビュー取材
16:30～17:10 竹下さんと被災証言語り主との懇談会
17:10～17:40 合同記者会見

「かたりつぎ～朗読と音楽の夕べ～」

18:00～開演

第一部

18:00～18:05 (1)ご挨拶 多賀城市長 菊地 健次郎 氏
18:05～18:15 (2)合唱 宮城県多賀城高等学校合唱部のみなさん
18:15～18:40 (3)講演 富田 博秋氏(東北大学教授)
18:40～18:45 (4)報告 柴山 明寛氏(東北大学准教授)みちのく震録伝の活動紹介

第二部

19:00～20:10 (5)「かたりつぎ～朗読と音楽の夕べ～」



竹下景子(たけした けいこ) 【俳優】

1953年9月15日生まれ 愛知県名古屋市出身
東京女子大学 文理学部社会学科卒業

NHK「中学生群像」出演を経て、1973年NHK銀河テレビ小説『波の塔』で本格的デビュー。
映画『男はつらいよ』のマドンナ役を3度務め、『学校』では第17回日本アカデミー賞優秀助演女優賞を受賞。
2007年、舞台『朝焼けのマンハッタン』『海と日傘』で、第42回紀伊國屋演劇賞個人賞を受賞。
2015年、第66回日本放送協会放送文化賞を受賞。
テレビ・映画・舞台への出演の他、
2005年日本国際博覧会「愛・地球博」日本館総館長をはじめ、「世界の子どもにワクチンを日本委員会」ワクチン大使、国連WFP協会親善大使、
京都国立博物館文化大使、C・C・C富良野自然塾でのインストラクターなど幅広く活動している。

する街づくりをプロデュースしようという活動がありまして、震災から4年目のその一環の中で、市民有志による「復興支援コンサート」プロジェクトとの出逢いがありました。たまたま兵庫が誇る文化人のお一人でもいらつしやる漫画家の手塚治虫さんのアニメーション映画「火の鳥2772」で火の鳥の声をさせていたことがご縁で、フェニックスが復興のシンボルであることからお話があり、公募に寄せられた詩やエッセーを読むという形で朗読を始めました。今年、阪神淡路から20年が経ち、その時に生まれた人が成人して、震災経験の無い方が神戸の人口の4割になります。まだまだ、癒えない悲しみを持った方もいらつしやつて、でも、



その一方で風化も始まっています。続けることが、未来に繋がればという想いです。

東北での「かたりつぎ」朗読と音楽の夕べ」で朗読される詩は、神戸とは別の試みの詩作によるものだそうですね

—はい、被災地で集められた体験の声を、専門のライターさんが構成してできあがったものを読んでいます。犠牲になられた方たちの慰霊と、もうひとつには、震災の記録を、みんなの記憶に留めて、未来に繋ぐという学術的な意義もあります。

過去にも大きな自然災害、津波もあれば、地震もあるというこの地を故郷として生きて暮らす方たちがいらつしやる。今回の被災地を中心に、歴史的な災害から東日本大震災までを、いかに検証し、今後に伝えるか、東北大学が研究しているんですね。「災害科学国際研究所」をたちあげ、東日本大震災を「データ・ベース化」という科学的な取り組みを続け、その中の震災アーカイブプロジェクト「みちのく震録伝」のメンバーが、実際に被災地に入って、フィール

でどのように被災されたか、さまざまな体験があつて、4年が経とうとしています。経過もまた、おのおの異なります。みなさま、それぞれに震災との向き合い方も違つていて、一括りにはできません。原稿は、被災体験の記録を朗読用にリライトしたものですから、そこにある言葉は、実際の深い想いの何分の1にも満たないのではないかと。読んでいて言葉を失うこともあります。想像力をふりしぼつて、毎年、毎年、ああ、こんなことがあつたのだと、想いをめぐらせながらやっています。東北の風土が育んだ忍耐強さは、周りにも優しく、この地に生活する人たちの想いをどう伝えたいのか。私自身も、まだまだ試行錯誤ですが、言葉に私情や感想をいれることなく伝えられたらと思つています。

東北で4年目、続けること、どのように感じていますか

—被災された体験の語り主の皆さまや、会場に足を運び、震災に心寄せてくださる方たちと、1年に1度でもお会いできることは、とて

も大きいです。渦中にあると、言葉にはできない。悲しみが癒えるまで伝えられない。そんな想いがあることを教わりました。また、それぞれの悲しみを力に変えていらつしやることも、強く感じています。そうした今の気持ちもお伝えできればと思っています。記録として残す。そして、記憶となつて残る。それは、命について考え、命が受け継がれるということでもあります。一緒にいられる場所がある。共有できる思いがある。同じこの時代に生きて、かけがえのない想いを以て、つながっている。そんな広がりの前に、小さくても未来への一步を進めてくださつたら嬉しいです。

—竹下景子さん 談—
—聞き手 塩野崎佳子—

16:30
~
17:10

被災証言語り主と 竹下さんの懇談会

リハーサルを終えた竹下さんが、語り主の皆さんの待つ控室に息を弾ませて飛び込んでいらつしやいました。

竹下さんの表情にも新たな出会いと再会を

ド・ワークの形で、生の声を集めているんです。その記録から、復興、そして未来の滅災に生かせる重要な言葉や想いを、わかりやすいショート・ストーリーの詩に起こして、「かたりつぎ記憶」として残しています。今年も、その中から7篇の詩を朗読します。

2012年、初めて仙台で朗読した時の雰囲気は、1999年の神戸での始まりの時の空気が、とても似ていると思えました。

朗読に込める想いはどのようなものでしょうか

—神戸の公募作として寄せられた詩には、その方の人生や体験から生まれ出た切実な想いとしての言葉が在ります。その方がどんな想いでその言葉を選んだのか。言葉、イコール想いなんですね。それらのもつ言葉の力が、私には伝わってきます。きれいな声というだけではダメ、上手に読むだけでもダメ。作者の方と同じ想いを持ちながら、ただただ、きちんと伝えたいという想いでいます。

東北では、広域にまたがる震災でした。どこ



竹下さんと語る、佐々木和信さんご夫婦(気仙沼)、澁谷大司さんご夫婦(多賀城)





俳優 竹下 景子氏 / 東北大学災害科学国際研究所長 今村 文彦氏
多賀城市長 菊地 健次郎氏 / 宮城学院女子大学長 平川 新氏
東北文化学園大学教授 志賀野 桂一氏 / 画家 加川 広重氏

喜ぶ昂揚感が見えます。昨年の語り主の知ったお顔を見つめるや否や「まあ、お元気でしたか？その後、いかがですか」と駆け寄りました。語り主の皆さんの一言一句に聴き入り、深くうなづき、時に質問し、想いを受け止める竹下さん。交流と対話の中で、全員に笑顔と笑いが生まれ、体験と想いは、竹下さんにバトンタッチされ、公演での朗読にかたりつがれます。

17:10
～
17:40

合同記者会見

「かたりつぎ」朗読と音楽の夕べ」を主催した東北大学災害科学国際研究所長の今村文彦先生が記者会見で、「『かたりつぎ』が定例化できたのは、竹下景子さんのお陰です。東北大としては、当時の被災状況、そこから得られる教訓をいかに残すか、これに全力をあげています。また、いかに伝えるのかも非常に大切な事で、それが我々の大きな役割だと考えております。学術会議等以外に、ひとりひとりの心に響く形で伝える活動が必要だと思っていたところ、『かたりつぎ』で状況を伝える大切さが、回を重ねるごとに分かってきました。これ

まで3回、東北大学内で開催されてきた『かたりつぎ』が、多賀城市で開催されることは、新たな役割、新たな意義に繋がると期待しています」と挨拶されました。

また、同じく主催者で、2013年に「減災都市宣言」をした多賀城市の菊池健次郎市長は、「多賀城では188名の方が亡くなられました。今日の会場の多賀城市文化センターも、被災直後は避難する人で溢れ、足を踏み入れる事もできない状況でした。復興期が終わり、去年から再生期に入って、国の支援を得て、災害公営住宅の建設も進み、春には、160世帯が完成します。しかし、一方で、大震災を風化させないために、竹下さんの『かたりつぎ』が重要です」と話されました。

そして、会見の質疑で、「震災から4年・4回目」というキーワードを尋ねられた東北文化学園大学教授で、「かたりつぎ」仙台実行委員会」の志賀野桂一先生は、「今年、竹下さんが朗読されるのは、東北各エリアで口述筆記によつて集められた3000部の証言記録から取り上げた7篇のストーリーです。4年近く経ちますと、中には、生々しい状況から、少しず

つ癒えてきて、希望に向かっていると感じられるものもあります。しかし、時が経つ程に見えるてくる親子の関係など、根の深い問題もあると感じます。ドフマティックでないだけに、それを淡々と朗読されるのは、竹下さんならではの「思います」と答えられました。

18:00
～
18:40

第一部 開演

公演の第一部、被災地の皆さんと同じ想いを共有したいとの願いからでしょうか。客席には竹下景子さんの姿がありました。

18:15
～
18:40

講演

富田博秋氏（東北大学教授）

東北大学教授で、精神科医でもいらつしやる富田博秋先生は、この講演の中で、次のように述べられました。

「被災から4年、心の健康を扱う精神科医として、心の病から回復の途上にあるのではない

かと思えます。しかし、被災地域の抑うつ状態は、2014年の調査でも、辛いと答える人が3割と維持傾向にあります。心的外傷・喪失感・環境変化によるストレスといった『災害ストレス』に直面した人の反応の正常な段階として、『FIGHT or FLIGHT RESPONSE』（闘うか逃げるか反応）が起こります。心が反応して、記憶や感情の消化・整理、沈静化を行うのです。それができないと、被災体験が生々しくよみがえり、記憶を呼び起こす回避したり、過覚醒状態でイライラドキドキして眠れなくなったりします。『心の復興』は、『知る』こと。気づいて労働。人と繋がるのが重要です。身体・心がどうできているかを知り、回復可能な問題であり、有効な回復方法や有用な相談先があることを『知る』こと。特に男性には、『繋がり作り』も必要。地域が震災体験を忘れていないということ、震災体験を話しても良いという雰囲気作りが大切です。そして、体験や気持ちを話して共有することが、記憶を消化させ、回復への大きな力となります」と、「かたりつぎ」が心の復興に果たす役割の大きさに言及されました。

18:40
～
18:45

報告

柴山明寛氏（東北大学准教授）
みちのく震録伝の活動紹介

地震工学・建築工学が専門で、東日本大震災以降、震災アーカイブのプロジェクト「みちのく震録伝」にたずさわる柴山先生は、「3・11から、地形の情報はじめ、数千の証言記録や写真など、40万点の震災記録を収集しています。南海トラフ等の防災・減災に役立て、災害記録や記憶を伝承するため、学術的な観点から、後世にかたりつぐための研究を行っています」と報告されました。

19:00
～
20:10

第二部 かたりつぎ

～朗読と音楽の夕べ～



バッハの名曲につて7篇のストーリーが朗読されました。竹下さんが、今年もつとも印象に残ったという宮城県本吉郡南三陸町の高橋生佐藤美南さんの詩『伝えたいことはふたつある』を読み上げました。佐藤さんは、震災の後、故郷を離れて初めて、自分のふるさと南三陸がどんなに好きだったかに気づきます。空が暗く



て何も無い町は嫌いだとさえ思っていたのに。そして、高校生になった今、また、南三陸に帰り、「語り部」を続けているそうです。震災では、大好きだったおばさまも亡くしました。可愛がってくれたおばさまに一度もお礼の言葉を伝えないうままに別れることになってしまった自責の念。でも、もうこれからは、悔いの残る生き方はしたくない！辛い体験をバネにして、揺るぎない故郷への想いと、前向きに生きる姿勢が、読み上げられるストーリーに詰まっています。朗読する竹下さんの声が少しかだけ揺れました。舞台と客席が共鳴し、感動が連鎖していきました。「かたりつがれたその時」と「新しく生まれた決意」に私たちは涙があふれました。

フィナーレで、竹下さんがソロで「愛の色」(作詞・六ツ見純代/作曲・清岡千穂)を熱唱するというサプライズがありました。客席から、大きな歓声が湧き起ります。この曲は、被災者に寄り添う竹下さんをイメージして作られたもの。この歌のプレゼントは、竹下さんから、ここに集う人すべてに向けられたエールであり、「一緒に前をむいて進みましょう」のメッセージ

だと感じました。歌いながら客席に降り立った竹下さんと私たちは、心ひとつになりました。

**終演後
会場で**

幕が降り、なお余韻を残す会場で、語り主のおひとり・菅原龍也さん(岩沼市)は、「感動しました。竹下さんが朗読すると、自分の体験なのに、他人の事のように客観的に聴くことができました。明日から仕事に頑張つて、ステージにあがってくれた全ての人、これに関わってくれた全ての人に恩返ししたい」

もうひとりの語り主・澁谷さんの奥さま(和子さん)は、



澁谷さんの奥さま(和子さん)

「地元においても何もできないのに、竹下さんがここまでいらつしやうって、被災者のためにやってくださるのは、ほんとうに有難い。懇談会の席でお会いした竹下さんは、気さくで優しい方でした。朗読は本当に心に響きました。かたりを通して、竹下さんの温かい人柄が伝わってくるからなのです」

お二人は、それぞれに感謝の気持ちをお話してくださいました。

神戸からこの日のために、会場入りされた神戸復興支援コンサート実行委員会 事務局長 田平純吉氏も、次のように証言されました。

「震災体験は、すぐには語れない人もいる。幼い子の夢もある。被災者として心を吐露するための詩。未熟なものもある。朗読力が必要だった。やはり竹下さんしかいませんでした。竹下さんが朗読すると、詩が、詩の力を超える。何倍にもなって、個人の体験が皆の想いになる。想いが伝わるから、皆、泣いてしまう。毎年リピーターが多いのもそのおかげでしょう。20年目の今年1月、3年ぶりに兵庫県内で「詩の朗読とメモリアルコンサート」が開催されました。節

目の20年は、竹下さん以外に考えられませんでした。そして、今日が多賀城市文化センター、阪神淡路を伝えていく大切さは、竹下さんを通じて、東北の地でも実践されました」



折しも、3月14日から18日までの仙台では、国連全加盟国193ヶ国、国際機関、認定NGO等の参加による「第3回国連防災世界会議」が開催されました。

竹下さんは、先のインタビューで「どんな想いで震災と向き合っていたらよかったのかと思う時、悲しみを力に変えて、未来への一歩につなげていらつしやるのが、どんなに素晴らしいことかを感じています。大震災を忘れない。これからも、ずっと『かたりつぎ』は続いていくことになると思います」と、温かく心強い言葉を残して、会場を後にされました。

取材&文：塩野崎佳子
写真：渡邊八房

3.11 私たちは忘れない

震災当時の多賀城市

2011.4/11撮影



花洲浜七ヶ浜漁港



桜木地区



七ヶ浜町汐見台南